

中央経済社

日本型 成熟社会

林雄二郎

●われらどこへゆくべきか

中央経済社

日本型 成熟社会

●われらどこへゆくべきか

林雄二郎

日本型成熟社会・われらどこへゆくべきか

昭和50年8月1日 初版発行

昭和51年3月1日 8版発行

著 者 林 雄 二 郎

発行者 渡 辺 正 一

発行所 (株)中央経済社

東京都千代田区神田神保町1-31-2

〒101 電 話 (293) 3 3 7 1 (編集)

(293) 3 3 8 1 (営業)

振替口座 東京 0-8432

印刷/真 珠 社

製本/誠 製 本

© 〈検印省略〉

0036-610678-4621

まえがき

生れつきのつむじまがり——事実、私のつむじは頭の中央にはついていないで、かなり左の方にズレている——のせいだろうか、私には、いわゆる世間の常識のようにいわれていることなかに、どうしても腑に落ちないことがよくある。

近ごろよくいわれる省資源、省エネルギー、そして、そのための資源のリサイクル——そのどれもが、言葉は同じでも、私の考えるそれと、世間でひろくいわれているそれとは、中身が違ふ。それも、根本的なところで違っている。当然ながら、私は、私の考えが正しいと信じているので、ひとと話していて、全く同じ言葉で話し合っているのに、*「違ふよ違ふよ、そうじゃないんだ」*というもどかしさに、なんともいえないムナしさというか、シラけた気持ちに襲われることがしょっちゅうである。

政府の委員会に出席する。並いる先生方はいずれも錚々たるその道の大家ばかり。だが、意見をきこうとする政府側の考えも、答える委員の側の考えも、両方とも基本的なところで私の考え

とは違う。だから意見のいいようがなくてひとりでイライラしている。そんなことがよくある。

先月も、衆議院の物価問題特別委員会に参考人として呼び出された。資源のリサイクルについての意見をきかれた。このときも例によって、一番最後に意見をもとめられた私は、「今までの論議はことごとく、私には見当違いのように思われます」といわざるをえなかった。議員さん方はシラけただろうが、私のほうがもっとシラけた。

リサイクル——といえば、廃棄物の再生利用のこととされているが、それが第一に気に入らない。今まで棄てていたものを、もったいないから廃物利用をして役立てようということは、それ自体としては、むしろ悪いことではなく、結構なことである。だから、私はそれに反対したり、そんなことをするのは間違っている、などというつもりは全くない。私がいいたいのは、それだけでは本当のリサイクルにならないのではないかとということである。

リサイクル、つまり、循環、くり返すということは、本来、自然の摂理であって、人間も自然の一部である以上、この大自然の摂理の埒外にあっていいはずはない。ところで、廃物利用は、その言葉の示すように、本来的には、それをしなくてもかまわないことであって、それなくしては存立しえないという筋合いのものではない。いうことは、自然の摂理とは関係のないことだともいえる。そういう意味では、同じリサイクルでも、工業にくらべれば、より大自然に密着し

ている農業の場合には、その意味が本質的に違ふ。農業というのは、リサイクルを前提にした産業であり、つまり、それなくしては存立しえない産業である。だから農業の論理と、工業の論理とは根本的に異っていることを、はっきりと認識しておく必要がある。

農業社会が、工業社会になってゆくことを私たちは進歩と呼ぶ。そのこと自体は決して誤ってはいない。何故なら、農業社会においては不可能であつたことが、工業化の結果、可能になつた、そのようなことが数えきれないほどある。それを進歩と呼ぶことは当然であらう。しかし、進歩と呼ばれる社会変化はすべて正しいことのみであるとは限らない。

農業の論理がリサイクルであるのにくらべて、工業の論理は連続性と、それに裏付けられた拡大、つまり連続的な拡大であるといえる。その結果、私たちは農業社会を停滞という言葉で象徴させ、工業社会を発展という言葉で象徴させる。そして停滞から発展への転換は、たしかに進歩であらう。しかし、その進歩が、その代償として、リサイクル機能の喪失を結果せしめてきたとすれば、それはあまりにも大きな忘れものである。

工業社会のなかに、いかに自然の摂理をよみがえらしてゆくか、工業の論理のなかに、いかに農業の論理を組み入れてゆくか。リサイクル機能は、まさにそのような視点から考えられなければならないはずである。

いいかえれば、工業社会におけるリサイクル機能を、それなくしては工業社会が存立しえないようにするにはどうしたらいいか。あればあったほうがいいというのと、それがなければならぬというのとでは、全くその意義が異なる。廃物利用という、土俵のなかでのみ論じられているリサイクル論を早く、もっと本質的な論議に昇華させてゆかねばならない。

しかも、考えてみると、日本人の発想のパターンは、もともと、自分の考えを確立するため、他人の鏡に映してみてもそれを自らにはねかえらすというパターンであり、それはいわばリサイクル・パターンとでもいうべきものである。ということは、社会的機能としてのリサイクル機能とはどのような機能であるのかについて、日本人は最もよく理解できるはずであると思う。

私が本書を書くにいたった問題意識は、このようなものであった。

終りに、私にこのようなチャンスを与えられた中央経済社の山本時男取締役ならびに関博之氏に対して心から感謝したい。私の問題意識に対して、少しでも多くの方々からの御意見をいただきたく思うものである。

昭和五十年六月

林 雄 二 郎

目次

一 われらどこにゆくべきか

1	離陸したばかりの日本	一
---	------------	---

ディクオフ

2	日本型成熟社会をめざして	五
---	--------------	---

二 日本型とはなにか

1	あべこべの実感	二
---	---------	---

	紳士道と武士道	二
--	---------	---

	ある日本人論	五
--	--------	---

2	不可解の実感	三
---	--------	---

日本人の天性……………	二三
すさまじい忍耐力……………	二六
3 青年と『性悪説』……………	三三
「世界青年意識調査」の結果……………	三三
新しい型の「日本人」……………	三六
自分をうつす他人という鏡……………	三九
4 環境と自分……………	四三
よいと思う環境とは……………	四三
「何をされたか」と「何をするか」……………	四四
5 リサイクルの発想……………	四六
興味ある「国民性調査」……………	四六
思考の遍歴のパターン……………	四九
科学技術への楽観的期待……………	五二

三 成熟社会のしるし

6	高度成長のもたらしたもの……………	六〇
	組織と人間……………	六〇
	ドラスティックな意識の変化……………	六三
7	昔はどうであったか……………	六六
	半世紀もためらわれていた鎖国……………	六六
	鎖国の中の外国交流……………	七三
	開国への逡巡……………	七五
	工業文明の流入と意識の変化……………	八〇
1	日本人のリサイクル感……………	八五
	乞食がない東京……………	八五
	満足度のモノサシ……………	八八

四 日本型成熟社会の構想

2	デニス・ガボールの成熟社会論	九二
	EQ (倫理指数) による社会の分類	九二
	二十一世紀に実現する“天国社会”	九三
	イギリスの上流社会はなぜすぐれているか	九七
3	高等教育はだれのものか	一〇四
	マスプロ大学の誤り	一〇四
	ヨーロッパのエリート教育	一〇七
	日本の教育としつけ	一〇九
1	くり返しの機能がふさわしい社会	一一三
	農業と工業	一一三
	土地と人間との対話	一一六
	帰巢本能が強い日本人	一二〇

2	齒止めのない工業社会	一三
	重要な齒止めの機能	一三
	失われた季節感と地域感	一六
	工業の連続性と拡大性	一〇
3	技術開発と有限な地球	一三
	望みを満たしてくれる仕掛け	一三
	ニーズ・機能・技術	一四
	規模の拡大をもたらす技術	一七
4	工業の農業化	一五
	現代人は自然に帰れるか	一五
	“農業化” 工業社会を求めて	一四

五 “もの”をリサイクルする仕組み

1	リサイクルを考えた製品づくり	一四
	問題の「ゴミ」	一四
	廃物利用をこえて	一五
2	負の技術の発想	一五
	ひたすら進化を求める人間	一五
	自然界のバランスに学ぶ	一六
	公害防除費用の見積り方	一六

六 情報をリサイクルするために

1	マスコミにたかまるフィードバックの要求	一七
	一方交通の情報の流れ	一七
	画一化から個性化へすすむ受け手	一七

七 社会的便益のリサイクル

情報洪水の中の情報不足……………	一六九
かわる新聞のイメージ……………	一七二
大新聞の凋落現象……………	一七五
コミュニティ・メディアの形成……………	一七七
地方住民とU局テレビとの交流……………	一八六
参加のシステムをどうするか……………	一八三
システムの二つの機能……………	一八三
バスはバス専用道路を走れ……………	一八四
“自動車の自由”は規制すべきか……………	一八六
患者の気持を無視した医療のシステム……………	一八八
—— “文明の利器”を生かす道……………	
1 おしつぶされた文化……………	一九二

文明と文化……………	一九二
文化の復興は考えられるか……………	一九五
2 社会的便益を受けるために……………	一九六
“文明の利器”を使いこなす……………	一九六
大衆消費財となったコンピュータ……………	二〇一
新幹線は社会的に使われているか……………	二〇三
社会的費用をプラスした運賃……………	二〇六
社会的便益の社会的使い方……………	二〇八
3 日本人の社会意識……………	二一〇
集団帰属の意識……………	二一〇
会社意識より社会意識を……………	二一三
4 試行錯誤から生れるもの……………	二一八
市民意識はどのように形成されるか……………	二二八

八 環境のリサイクルをはかるために

環境から学ぶ……………	二二〇
住民エコの評価……………	二二三
1 古いものを残す考え……………	二三五
環境をつくる……………	二三五
日本の博物館……………	二三七
2 ひろがる環境……………	二三〇
大衆化する文化……………	二三〇
擬似体験によるひろがり……………	二三四
テレビ時代の人間……………	二三六
3 変化と調和……………	二四二
工場の再生利用にみる環境のリサイクル……………	二四二

九 高度工業社会のめざすもの

永遠につづく環境の激変……………	二四三
アセスメントの具体的方法……………	二四五
前向きに生かすリサイクル機能……………	二四九
くり返し安定成長する日本型成熟社会……………	二五二